

# コースデザイン・ 教授法ワークショップと FDネットワーク

# コースデザイン・ 教授法ワークショップと FDネットワーク

## はじめに

### ■本書について

『FD 担当者必携マニュアル』シリーズは、大学で新しく FD を担当することになった人たちが、業務を遂行する上で最低限必要な事柄をまとめたものである。日本の大学では FD が盛んになってきたけれども、その内容は年に数回の専門家による講演型研修が主であり、大学教員の行動変容をもたらすものとは言いがたい。一方、より効果の高い研修内容・方法については、共有されたものが少なく、各大学の FD 担当者は手探り状態で実施しているのもまた事実である。FD 担当者を支援するツールの開発が求められているのである。

本書のアイデアは、各大学の FD 担当者で構成されている、FD ネットワーク中四国（以下、ネットワーク、次頁参照）の話し合いの中から生まれた。この組織のメンバーは、大学教員の能力開発という日本では未開拓の業務を、限られた人数で行っている。慢性的なスタッフ不足という問題を解決するためには、各学部に所属する教員の中から、FD を担当できる人材を育成していく必要性がある。そのために、FD 担当者の養成講座を開発、実施しようということになった。

第 1 巻『FD プログラムの開発・実施・評価』、第 2 巻『ファカルティ・ディベロッパー入門講座』、第 3 巻『授業コンサルテーション』に引き続く、本巻第 4 巻は、カナダやスイスにおける FD ネットワークの実態について紹介した内容をまとめたものである。

本書の基になっているのは、2008 年 3 月 25 日に愛媛大学で開催された「ファカルティ・ディベロッパー養成講座Ⅱ」である。本講座は、スイス・ローザンヌ大学学習・教授センター長であるデニス・ベセリアム（Denis Berthiaume）氏を招聘し、全国の大学から 26 名の FD 担当者を対象に行われたものである。ベセリアム氏は 7 年間に渡って、世界各国の研究大学においてファカルティ・ディベロッパーとして FD に関わられている。勤務先であるスイスやカナダにおける FD ネットワークの実態について、1. コースデザイン・教授法ワークショップ、2. カナダ・CDTW ネットワーク、3. ネットワークとしての活動について講演をいただいた。

おわりに、講師をつとめていただいたデニス・ベセリアム氏、参加いただいた皆様に心から御礼申し上げます。

佐藤浩章（愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室）

## ■ FD ネットワーク中四国について

主に中国・四国地区の大学が中心となり、FD プログラムの共同実施、教材の共同開発などを目的に連携したネットワーク。各大学の高等教育センターに所属する教員を中心に構成されていた。2003年に設立され、会合、MLでの情報交換を行ってきた。愛媛大学教育・学生支援機構 教育企画室が事務局。2008年秋に、四国地区大学教職員能力開発ネットワークが誕生すると同時に発展的に解消された。

### ファカルティ・ディベロッパー養成講座Ⅱ参加者 (2008.3/25 実施)

江本 理恵	(岩手大学大学教育総合センター)
長澤 多代	(長崎大学大学教育機能開発センター)
山田 剛史	(島根大学教育開発センター)
田中 正弘	(島根大学教育開発センター)
葛城 浩一	(香川大学大学教育開発センター)
菊池 重雄	(玉川大学コア・FYE 教育センター)
富田 美加	(茨城県立医療大学保健医療学部看護学科)
沖 裕貴	(立命館大学大学教育開発・支援センター)
細川 和仁	(秋田大学教育推進総合センター)
中島 英博	(三重大学高等教育創造開発センター)
稲永 由紀	(筑波大学大学研究センター)
川島 啓二	(国立教育政策研究所高等教育研究部)
加藤かおり	(新潟大学大学教育開発研究センター)
小島佐恵子	(北里大学一般教育部 専任講師・高等教育開発センター (兼任))
岡田 佳子	(長崎大学大学教育機能開発センター)
野本 ひさ	(愛媛大学医学部看護学科)
小林 直人	(愛媛大学総合医学教育センター)
川野 卓二	(徳島大学大学開放実践センター)
香川 順子	(徳島大学大学開放実践センター)
野田 文香	(立命館大学大学教育開発・支援センター)
青山 佳世	(立命館大学大学教育開発・支援センター)
朝川 俊二	(日本福祉大学教育開発室)
谷地 宣亮	(日本福祉大学経済学部 / 全学教育開発機構員)
松岡 幸司	(信州大学全学教育機構言語教育センター / 高等教育開発システム部兼任)
長尾 秀夫	(愛媛大学教育学部)
竹永 雄二	(愛媛大学教育学部)

敬称略 順不同

平成 21 年 3 月 30 日

お詫びと訂正

「FD 担当者必携マニュアル 第 4 巻」の 2 ページに掲載しております参加者一覧から、

**【山形大学高等教育研究企画センター 杉原真晃 様】**

のお名前が漏れております。

真に申し訳ありません。

愛媛大学教育・学生支援機構 教育企画室

e - mail : [info@iec.ehime-u.ac.jp](mailto:info@iec.ehime-u.ac.jp)

## 目次

1. はじめに	4
2. コースデザイン・教授法ワークショップ	5
3. カナダ・CDTWネットワーク	13
4. ネットワークとしての活動	16
5. 世界のFDネットワーク	20
<b>巻末資料</b>	
当日ポスター	24
事項アンケート項目（日本文）	26
事項アンケート集計結果（日本文）	27

# マギル大学におけるコースデザイン・教授法ワークショップとFDネットワーク

デニス・ベセアム

スイス ローザンヌ大学 学習・教授センター長

カナダ マギル大学 教授・学習サービス部門協力メンバー

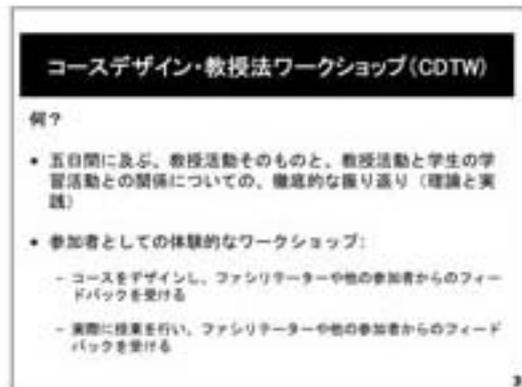
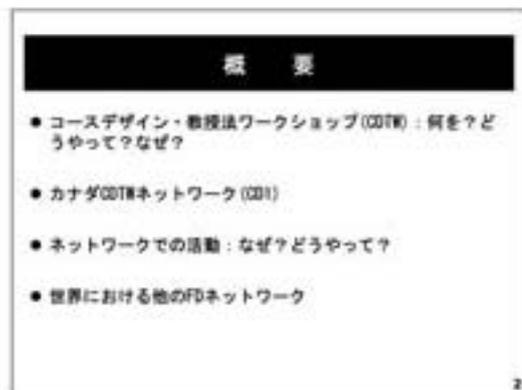
## 1. はじめに

皆様こんにちは。私は今日ここに来ることができてとても嬉しく思っています。光栄に存じております。皆さんが自己紹介をされているときに、100%のファカルティ・ディベロッパーであるか、あるいはパートタイマーであるかということをお話しただいたと思いますけども、私自身自分のことを申し上げますと、私は100%ファカルティ・ディベロッパーであり、100%管理者(ディレクター)でもあり、それから100%研究者(リサーチャー)でもあり、さらに100%問題解決者(プロブレム・ソルバー)ということです。

今日お話することの概要ですけれども、まず今日ここで話したいのは、実際に行われているコースデザイン・教授法ワークショップの事例の一つお示ししたいと思います。それは、カナダでは何度も繰り返し行われているものです。これがどのようなものであるかということ、それからどうやって行っているか、それから何故必要か、存在意義ということについてお話申し上げます。カナダではこのワークショップ形式でセミナーを行っています。これはうまく機能しているわけですが、そのワークショップの形式について取り上げたいと思います。

次にファカルティ・ディベロッパーのネットワーク作りということについて話したいと思います。そのネットワークというのは何のために必要か、またそのネットワークとはどういったものか、そういうことをお話してそれを皆様のネットワーク作りにお役立ていただきたいと思っています。ネットワークに関しては良いことも悪いことも両方ありまして、問題・利点を挙げたいと思います。

最後に、世界中のFDネットワークにはどのようなものがあるかといったような例を見ていきたいと思います。いくつかの例を挙げますのでそれを見ていただいて、日本ではどういった例が当てはまるか、どういったことが採用できるかというようなことを考えていきたいと思います。



## 2. コースデザイン・教授法ワークショップ

マギル大学の例ですが、ワークショップを5日間に渡って行います。その5日間のワークショップの中で、教授活動に関して集中的に振り返りを行います。さらに教授活動と学生の学習との関わり、関係というものについても集中的に学びます。ここでは理論と実践との両方を5日間のワークショップの中で学ぶわけです。

また実際に授業をデザインし、それに対するフィードバックを受けることができます。講師と一緒に参加している参加者からフィードバックを受けます。さらに実際に授業を行い、こちらも講師や参加者からフィードバックを受けます。ですので、授業のデザインと教授実践の2点に焦点をあてています。

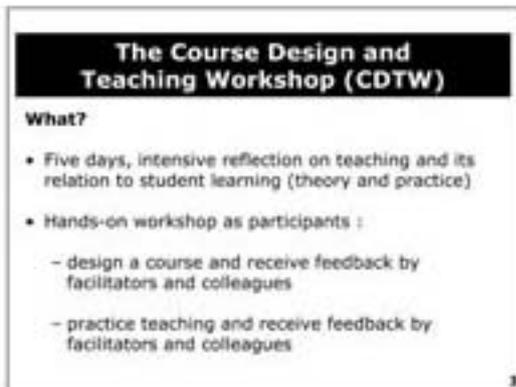
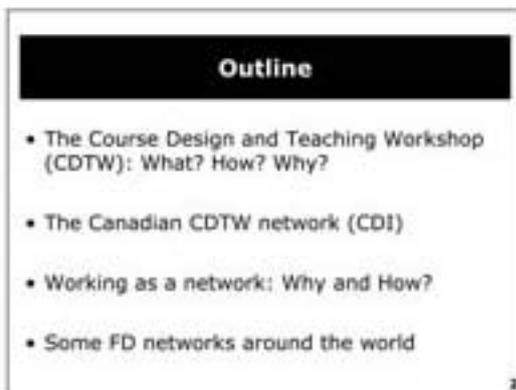
一つ目の授業デザインが網羅している事柄としては、コース内容の決定、目的・目標の明示、教育方略の選択と適用、それから評価方法の選択と適用があげられます。

二つ目の教授活動については、教育方略の実施、それからプレゼンテーションのテクニックの実践、それからビジュアル教材の開発と使用、それから他の学習者と交流を持つ、という点が網羅されています。

ではこれらをどのように行うのでしょうか。5日間を通して全ての日の午前中には授業デザインの内容を扱います。最初に大きなグループを対象にしたプレゼンテーションを行います。大きなグループとは、最高で約25名です。講師がその日のトピック、例えば、学習目標や教育方略に関するプレゼンテーションをします。

次に実践的な例を、補助講師によって示してもらいますが、この補助講師というのは1年前にワークショップに参加した人でありまして、この方々が例を示すことで今年の参加者に楽になってもらおうという意図があります。

次が、小グループでの個人作業ということになります。これは先ほどの25人のグループを3つのグループに分けます。1名の講師をグループごとに配置します。ここでは授業概要すなわちシラバスのデザインについて個々に作業していただきます。その小グループの中でペアを組んでいただき、そのペアでコースシラバスについて相互に批評したり評価したりするような作業をしていただきます。それによって各参加者がフィードバックを受けることができます。その交流活動（ソーシャル・アクティビティ）というものが非常に大事になりますので、お付き合いを深めるために交流会を開催し、ワインとチーズも提供します。その交流会は大きなグループの活動となります。



Q1

**質問者** 「同じような専門を持った人達がグループになっているのか、それとも任意で集められたグループなのでしょうか。」

A1

**ベセリアム** 「特に専門分野で分けているわけではありません。専門の科目というのは色々な分野で集めております。故意に新任の先生方と経験を積まれた先生方を一緒にしようということもありません。」

Q2

**質問者** 「シラバスを作成するのは先生個人の専門の科目ですか、それともシミュレーションで適当なものを作成するのですか。」

A2

**ベセリアム** 「どちらもあります。というのは、実際に担当をしていらっしゃる授業、現存する授業を改善するために、シラバスをデザインしていただいても結構ですし、今後誕生するであろう授業を将来のために考えて作るということでも結構です。」

最後になりますけれども、この中で一番皆さんに好かない活動かなと思いますけれども、夕方に、個人で文献を読んでいただいて、翌日のワークショップに備えて予習をしていただくという活動もあります。

次に午後の教授活動に関するセッションです。小さなグループで最高でも7名までに分かれて活動していただきます。その最高7名のグループに1人の講師と1人の補助講師が付きまます。講師というのは専任のFDeerでして、補助講師というのは前年にワークショップに参加した者です。最低でも3日間、10分間のプレゼンテーションをしていただきます。実際に授業をしてもらい、それをビデオに録画します。すべての参加者は講師と他の参加者からフィードバックを受けます。文書にしたものと口頭との両方でフィードバックを受けますので、自分がどういった点を改善したらよいかというアイデアを得ることができます。ここでは支援的な(サポータティブな)環境があるということが前提となります。これによってフィードバックを与える際にも批判的ではなく、相手を驚かすような批判は与えないというような暗黙のルールを作ることになります。支援的な環境の下でこそ参加者は新しいテクニックや教材というものを試してみることができるわけです。そうでない場合には参加者が新しいテクニックを試すことができなくなります。怖くなってしまいます。スライドには載っていないのですが、2つ重要な要素があります。1つは中身も重要ですが、こうしたプロセスも大事ということです。

### コースデザイン・教授法ワークショップ(CDTW)

#### どうやって?

- コースデザイン(午前)の部:
  - 大きなグループでのプレゼンテーション/ その日に扱う理論と概念について
  - 補助インストラクターによる実践的な例
  - コース概要に関する個人作業(小グループで)
  - 改善のためのペアワーク/ コース概要についてのフィードバックのやりとり
  - 実施を支援するための、大きなグループでのソーシャル・アクティビティ
  - 個人での読書と作業(クラス外)

5

### コースデザイン・教授法ワークショップ(CDTW)

#### • どうやって?

- コース教授活動(午後)の部:
  - 小グループでの活動(最大7名)
  - 参加者は、毎日10分間のプレゼンテーションを行う(ビデオ撮影)
  - 他の参加者とファシリテーターは、プレゼンテーションに対するフィードバックを提供
  - 練習から最大の利益を確保するための支援的環境
  - 参加者は新しいテクニックや教材に挑戦

6

### コースデザイン・教授法ワークショップ(CDTW)

#### なぜ?

- 目的: 教授に関わる決定と行動について意識的になる
- トレーニングというよりは、振り返りと成長
- 参加者に、考え、行動するための原理原則とツールの提供
- 参加者の経験の利用
- 参加者の教授行為をより「学習中心」にすることを目指す
- 理論と実践の両方、つまり学習したことを試してみることが大切

7

### コースデザイン・教授法ワークショップ(CDTW)

#### なぜ?

- 教授は自分自身を「教育の熟達者」でなく「学問の専門家」として見なす傾向にある
- 専門的知識と教育に関する一般的な知識をリンクさせることが大切
- 視点(価値観、信念)と知識が私たちの行動を導く
- 「学習中心」の教授を実施するために、自らの視点を振り返ることが重要
- 「学習中心」の大学教員コミュニティを創る

8

**The Course Design and Teaching Workshop (CDTW)**

**How?**

- **Course design (morning) portion:**
  - Large-group presentation/discussion of theory and concepts for the day
  - Practical examples by co-instructors
  - Individual work on course outline (within the context of small groups)
  - Pair-work to help progress / receive feedback on course outline
  - Large-group, social activities to support implementation
  - Individual reading and work (outside of class)

**The Course Design and Teaching Workshop (CDTW)**

**How?**

- **Course teaching (afternoon) portion:**
  - Small-group setting (maximum 7 participants)
  - Each day, participants make a 10-minute presentation (video recorded)
  - All participants and facilitators provide feedback on presentations
  - Supportive environment to ensure maximum benefit from exercise
  - Participants try new techniques or materials

**The Course Design and Teaching Workshop (CDTW)**

**Why?**

- Purpose: to become intentional about teaching decisions and actions
- Reflection and growth rather than training
- Provides participants with principles and tools for thinking/action
- Capitalizes on the participants' existing experience
- Aims at making the participants' teaching more learning-centered
- Important to work on both theory and practice, to try out what is being learned

**The Course Design and Teaching Workshop (CDTW)**

**Why?**

- Professors tend to see themselves as disciplinary specialists rather than teaching experts
- Important to link subject matter expertise with knowledge of teaching in general
- Perspectives (values, beliefs) and knowledge guide our actions
- Important to reflect upon our perspectives in order to implement learning-centered teaching
- Build a community of learning-centered university teachers

次にワークショップを行っていくうえで、「なぜ？」という疑問を明確にしていくことが大事になっていきます。なぜワークショップを行うのか。その目的を明確にしておくことが大事なのです。その目的は教授活動に関する決定と行動について意識的になるということです。参加者はなぜかということ意識してやるのが大事で、なぜかは分からないけれども他の人が皆やっているから何となくやろうかなというわけではダメなのです。なので、これはトレーニングというわけではありません。振り返りや成長を助けることです。このワークショップで私達が行うことは、参加者が考えたり行動したりするときに役に立つ原理・原則といったもの、あるいは道具になるものを皆様に供給していくということです。そして参加者の方々が既に持っている経験・知識を有効に活用しようということがあるわけです。新人の先生も経験を積んだ先生もいますが、新人の先生であったとしても経験・知識を持っているわけですから、この場で教えるのではなくて実際に持っているものを利用していこうと考えています。ここで目指しているものは「学習中心」の考え方に人々を持っていくということです。参加者に概念的な変革をもたらしたい。ですから、理論と実践両方を行うということが重要であり、ここで学んだものを実際に行ってみる、試してみるこそが重要なわけです。先ほど申し上げましたようにシラバスを作り、それをペアの相手に評価してもらうこともそういった目的で行っています。

**Q3**  
**質問者** 「『学習中心』というところですが、これはワークショップが学習中心で行われなければならないということなのか、教員が授業で教える際に学習中心にならないといけないということなのかどちらの意味でしょうか。」

**A3**  
**ベセイアム** 「これは私達が教えるものというよりも、生起していくものだとして理解しています。私達は何かを教えるというわけではなく、ワークショップにおいて参加者の方々に『教えるということは何か (What is teaching) ?』、そして『学習とは何か (What is learning?)』を考えていただく。そして実際に参加者が行っている行動と、考えていただいたものを比較していただく。ですから、各自の授業においてそのように考えていただくというレベルと、理念や考え方のレベルという2つのレベルで、学習中心であるといえます。」

教授達の考え方としては、自らは教員というよりも、学問分野の専門家であるという考えのほうが強い傾向にあると思います。特定の学問分野の専門家が教えていると考えがちでないかと思います。こういった先生方に、ご自分の専門科目と一般的な教育に関する知識をどのように関連付けるかということを考えていただくというのが大事です。

先ほどの質問とも関連しますが、私達には「視点」というものがあります。「価値観」とか「信念」、それから「知識」も持っているわけですが、こういったものが自分達の行動を導くのです。先ほどのお答えとして申し上げたいのが、今のような事柄を大事にしなければならないということです。つまりこちら側が教えるのではなくて、参加者の方々に自分の活動や考えを振り返っていただくようにすると、自ら気づいて学習中心のほうに向いていただけるというものです。

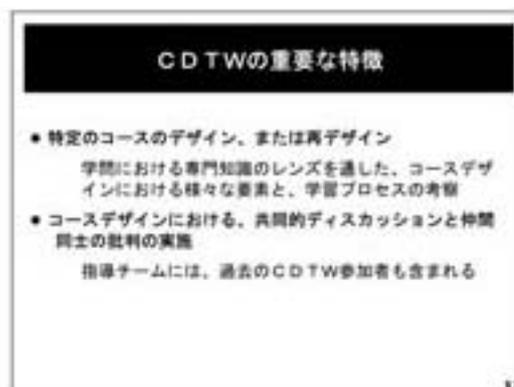
これは、ファカルティ・ディベロッパーの方々にとって有益な情報になると思うのですが、セミナーやワークショップをされる時は、まず参加者の教育に対するコンセプトについて考えてもらう時間をもつ。コンセプトを教える時間がない場合には、参加者自身について振り返っていただく時間をもつということですね。参加者自身にとって学習とはなにか、そして教授とは何かといったことをそれぞれ振りかえっていただく。そういった手法を取ることをお薦めします。

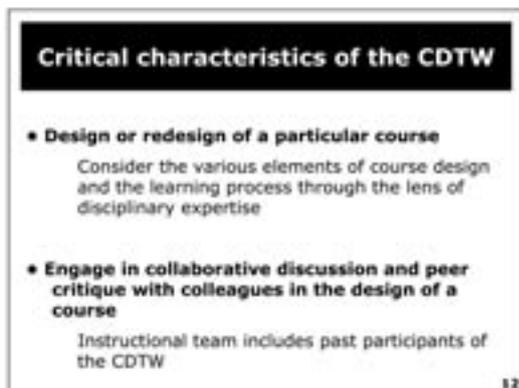
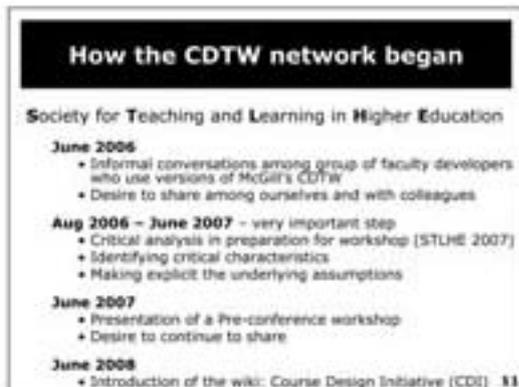
学習中心の考えを持っている大学教員のコミュニティを創っていくことが次に大事です。そのコミュニティを創るために先ほど申しあげましたソーシャル・イベント、ワインやチーズを出したりするような交流会をしたり、あるいはペアを組んで話をします。人というのは大体話しをすると、相手のことを覚えることができます。

1つ申し上げたいのは今ここで示しましたモデルは決して決まったものではないということ、大阪大学では4年間やっておりますけれども、全く違ったフォーマットでやっておりますのでこれが画一ではないということ覚えておいてください。また、私自身のフランスの大学でも、あるいは他の多くの大学でも全く違ったフォーマットを使っておりますので、皆さん自身にとっても皆さんご自身の大学にそれぞれ合った別の形というものがあるかもしれません。

ここで1分間皆さんに考える時間を差し上げたいと思います。そして質問を考えていただきたいと思います。ご自分の大学にあてはめてどういった点が質問になるか、自分の大学の立場からの質問を1分間考えていただきたいと思います。それでは1分間考えてください。

それでは1分がたったので椅子を戻していただきたい





と思います。ここで皆様からの質問を日本語で佐藤先生に書いていただきまして通訳が英語に直したものに対して、答えたいと思います。それでグループでディスカッションしていきたいと思います。

**Q4**  
**質問者**「コースデザインというところのコースというのは何を示しているのか、1つの科目なのかあるいは複数の科目が集まったものなのか、どういったものをイメージすればよいのか。」

**A4**  
**ベセリアム**「このコースというのは教授活動の1つのユニットでありまして、1学期でも1年でも構いません。」

**A4**  
**佐藤**「一般的に日本でいう1学期15回連続の授業をイメージしていただければ結構です。2学期に渡る場合は30回になります。」

**Q5**  
**質問者**「個人ワークは毎日行うのか。それと5日間あるということでスタッフがどのように関与していくのか。具体的なスケジュールはどうなっていますか。」

**A5**  
**ベセリアム**「まず第1日目ですけども、9時から12時まで最初の1時間半は大きなグループで活動します。それから休憩を取り後半の1時間半は小さなグループ又はペアワークということで活動します。これらはシラバス作成の活動です。そして2日目、3日目、4日目、5日目にはそれぞれ、目標・教育方略・評価・フォローアップ・振り返りといったそれぞれの内容について行います。最初の1時間半の大きなグループのときにはそのスペシャリスト達がプレゼンテーションを45分間行い、そして次の30分間は補助講師がプレゼンテーションを行います。午後には小さなグループに分かれて6、7人のグループに分かれて3時間活動を行います。一人あたり30分間という時間が確保されていまして、10分間でプレゼンテーションを行い、残りの20分間でフィードバックを受けたりディスカッションをしたりします。今申し上げたやり方はマイクロティーチングと呼ばれるスタンフォード大学で使われた方法です。」

**Q6**  
**質問者**「例えば1日目の午後には何をプレゼンテーションするのでしょうか。授業をプレゼンテーションするのでしょうか。」

**A6**  
**ベセリアム**「1日目は授業の内容についてプレゼンテーションを行います。コンセプト・マッピングという手法で内容を検討します。各自が授業内容を考えて、最終的な目標はマイクロティーチングを行うことにあります。」

A6

佐藤「私もワークショップには実際参加しましたので、コンセプト・マッピングの補足説明をします。授業では、私たちは色々な内容を教えますけれども、それぞれの内容はどういった関連をもっているのでしょうか。それぞれ内容を図示化して矢印をつけたり丸で囲んだりして、内容間の関係を表現します。それを1日目に発表する。2日目以降は、それを踏まえたミニ授業をプレゼンテーションします。」

A6

ベセIAM「最低でも3日間、午後にマイクロティーチングを実践することができます。1日目には、先ほど述べたコンセプト・マップについて発表し、プレゼンに慣れる。2日目は実際に授業のプレゼンテーションを行いそれに関するフィードバックを受ける。3日目は全く新しい教授方略を試しにやってみる。そこで何か新しいものを試していくという日です。」

Q7

質問者「午後は何時からですか。」

A7

ベセIAM「1時半から4時半です。」

Q8

質問者「ソーシャル・アクティビティ（交流活動）がプレゼンテーションにどう関係するのか説明していただきたい。」

A8

ベセIAM「2回ソーシャル・アクティビティに参加できます。1回目は水曜日の午後、2回目は金曜の朝にやります。壁やテーブルに皆さんが作成したコンセプト・マップを掲示します。それらの内容は目標、教育方略、評価に関するものです。壁やテーブルに貼られているマップを読み、質問やコメントがあると付箋に書き込んで貼り付けておくのです。作成者はフィードバックを得るし、そこから話が発展して内容が変更になったりします。ここで面白いのは、例えば生物学の先生が作成したマップを歴史の先生が見て『生物の先生はこういうことをやられていたんですか。なるほどそれは私の科目にも応用できます』ということで実際に応用することが可能になります。」

Q9

質問者「夕方以降の個人ワークというのは具体的に何をしているのかを知りたいです。」

A9

ベセIAM「第1日目にコンセプト・マップを作り始めます。これについては2日目にフィードバックを受けます。これで終わりではなく、フィードバックを得てもう1回新しいものに作り変えるわけです。翌日は学習成果について学び、また新たに洗練し直して、発展させていくのです。この5日間に渡り、参加者は自分達の職場に帰りませんので、夕方は読書に費やすことができます。読書課題をこなしてその内容を深め、翌日それに関して質問するという事です。その読書課題をこなしていただく際には読書ガイドというのを用意します。それは1ページものでありまし

基本的な仮定の明示

1. 学問的知識と教授行動をつなげる  
(Donald, 2002; Neumann, 2001; Rowland, 1999)

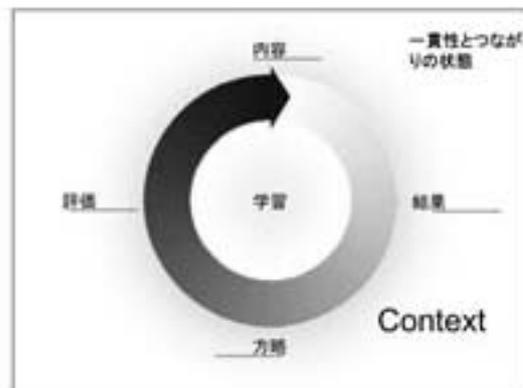
13



基本的な仮定の明示

1. 学問的知識と教授行動をつなげる  
(Donald, 2002; Neumann, 2001; Rowland, 1999)
2. 学習中心の教育  
(Garoian & Arundsen (Eds.), 2004)
3. コースデザインの要素における一貫性をつながり  
(Fields of Instructional Design and Systems Theory)

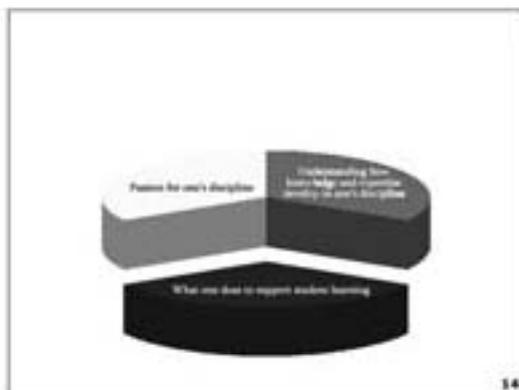
15



**Making explicit the underlying assumptions**

1. Linking disciplinary knowledge to teaching actions (Donald, 2002; Neumann, 2001; Rowland, 1999)

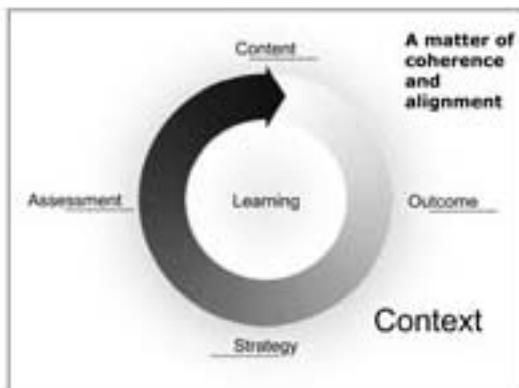
13



**Making explicit the underlying assumptions**

1. Linking disciplinary knowledge to teaching actions (Donald, 2002; Neumann, 2001; Rowland, 1999)
2. Learning-centred teaching (Sárvay & Arundson (Eds.), 2004)
3. Coherence and alignment of course design elements (Fields of Instructional Design and Systems Theory)

15



て、読書課題の概要、なぜこれを読むのか、これを読んだ際皆さんがどういった質問を抱かれるだろうかといったことを示しています。」

A9

佐藤「補足しますが、要するに学生向けの授業と同じように授業時間外学習として論文が1、2本配られます。先ほどの読書ガイドがついていますので、本当に時間が無いときは概要だけ読みます。もっと勉強したい人は通して文献を読みます。」

Q10

質問者「授業デザインに関係する文献ですか。」

A10

佐藤「全てに関わりますから、授業内容、教育方略、目標に関する事など様々です。次の日の予習にあたるものが出ます。結構ハードでした。クタクタになりました。」

Q11

質問者「このワークショップを行っている場所はどこですか。」

A11

ベセIAM「色々です。時と場合によります。大学外で行う場合のメリットとしては先生方が自分の職場に帰ることができないので、隔絶された環境の中で集中して行えるということがあげられます。デメリットとしては参加しない人が多いかもしれないということがあります。」

A11

佐藤「マギル大学では学内の教授・学習部門のオフィスでやりました。そこはかなり広くて近くに教室もありますので、移動もしながら2部屋でやりました。」

A11

ベセIAM「これから始められるなら学内で始められたほうが良いかと思います。といいますのは、最初から1週間研究室を空けて出て行く研修に対して先生方は抵抗があるでしょう。まずは大学内で行い、そして数年経った後にどこか別の場所で行うのが良いかと思います。」

Q12

質問者「『学習中心』というお話をされましたが、どれくらいの規模の学生さんを教えるのが標準と考えられているのですか。例えば日本の私立大学では300名とか500名とかそれ以上というわけですが、その場合にどういった研修が可能でどういう教授が可能か、そういう研修を持っておられるのか。」

A12

ベセIAM「授業は双方向型で行います。これは考え方の枠です。つまり『学習中心』というのは、どういった技法が応用できるかということでもなく、サイズが問題になるのではなく、理念・哲学（フィロソフィー）が問題になります。教授行為をどのように捉えるかという考え方ですので、クラスサイズが大きかろうが小さかろうがそれはあまり関係ありません。

ただ技法というものはあるわけです。大きなグループと関

与していく2つの技法があります。まず1つは有効にテクノロジーを利用するという事です。パワーポイントはスライドを見せながら上手に導入部分をクリアしていく双方向のやり取りです。2つ目の技法ですが、『学習中心』が目指しているのは学生をアクティブにするということです。学生をアクティブにするというのは、学生に考えさせそして発言させるということを目的にしているわけです。これを達成するために、毎回1時間授業があるのであれば、10分間は1つの共通の事例について考えさせるという活動を行います。例えば数学の時間を例にとってみましょう。授業終了前にひとつの問題を与えておくわけです。次の時間の冒頭にその解答から入ります。『誰かこれができる人は?』という誰かが出てきてそれを書くわけです。途中でやめたところでストップします。そして他の学生に聞きます。『ここまで同意しますか?』と言って、『はい』といえれば良いのですが、『違います』というところでまた議論を始めます。こういう風に進めていきます。このようにすると学生は自分で自ら考えそしてそれをみんなに話すということ、そしてさらに私とも話しをしますので私は実際に考えて理解しているかどうかということがわかります。こういった活動を『学習中心』と呼んでいるわけです。」

Q13

**質問者** 「1つはユニバーサル化時代になって学生のレベルが全体的に低くなった。どうしても学習した内容中心、学習成果中心に考えなくてはならなくなっているということ。もう1つは価値観が多様な時代になって色々な論理をもった学生が入ってくる。そういった学生達の理解を促進するためには『学習中心』にならなくてはいけないということではないでしょうか。」

A13

**ベセアム** 「その考えは正しいと考えます。特に2番目の件ですね。非常に一律ではなくて色々な学生達が入ってきます。そういった点が挙げられます。色々な学生達全員に利益を与えるためにどうするかというと、やはりみんなに実践して参加してもらいみんなに話してもらってそれぞれの学生に適用できるようにしていくということになるかと思えます。」

### 基本的な仮説の明示

1. 学問的知識と教授行動をつなげる  
(Donald, 2002; Neumann, 2001; Rowland, 1999)
2. 学習中心教授  
(Saroyan & Amundsen (Eds.), 2004)
3. コースデザインの要素における一貫性をつながり  
(Fields of Instructional Design and Systems Theory)
4. 教授活動を決定する際に求められる論理的アプローチ  
(Saroyan & Amundsen (Eds.), 2004; Shulman 1986, 1987)

17

### 基本的な仮説の明示

1. 学問的知識と教授行動をつなげる  
(Donald, 2002; Neumann, 2001; Rowland, 1999)
2. 学習中心教授  
(Saroyan & Amundsen (Eds.), 2004)
3. コースデザインの要素における一貫性をつながり  
(Fields of Instructional Design and Systems Theory)
4. 教授活動を決定する際に求められる、論理的アプローチ  
(Saroyan & Amundsen (Eds.), 2004; Shulman 1986, 1987)
5. 変化をもたらす学習の教授としての振り返り  
(McAlpine & Weston, 2000; Cranton, 1996; Mezirow, 1991; Schon, 1987)

18

### CDTW: カナダ教育開発イニシアティブ

STLHE カンファレンス前ワークショップ、2007年6月

- 要旨
- 1. 2003年、コースデザインと教授行動についての、一連の集中ワークショップがサセックス大学の教員対象に行われ、それから4年ほどで2回実施されている。(Saroyan and Amundsen, 2004)
  - 2. 非常に良い結果を出している他の大学のワークショップについての調査まで拡大された。同様に成功しているいくつかの大学の教員関係者が調査。(Simon Fraser, Concordia, Guelph, Waterloo, Wilfrid Laurier, University of Victoria)
  - 3. このセッションの参加者は、キーとなる方々と、このワークショップを体験できるプロセスを体験することになる。(例えば、コースデザインのプロセスをキーとなる概念とそれらの概念の体系を通して、コース内容の分析を助ける概念マッピングの枠で始めることによって教授の専門知識の知識を中心に置く。)
  - 4. 参加者は、それぞれの機関での実践に適切なコースデザイン・ワークショップの展開する支援を受ける。

19

### STLHE カンファレンス前ワークショップの参加者

- マギル大学 (Cynthia Weston and Mariela Tovar)
- サイモン・フレーザー大学 (Cheryl Amundsen)
- コンコーディア大学 (Janette Barrington)
- ビクトリア大学 (Catherine Caws and Geraldine VanGyn)
- ダルフ大学 (Trevor Holmes)
- ウォータールー大学 (Tracy Penny Light)
- ウィルフリッドロリエ大学 (Jeanette Macdonald)

20

### 3. カナダ・CDTW ネットワーク

カナダでは STLHE（高等教育教授学習活動協会）というものがあります。この協会は大学教授やファカルティ・ディベロッパーが教授活動についてもっと理解するための組織です。2006年の6月にそこのファカルティ・ディベロッパーが話し合いを持ちました。マギル大学で行われているワークショップを共同で行えないかどうかというものでした。2006年の8月から2007年の6月にかけて、実際にワークショップを行う前にプレ・ワークショップを行いました。それを行った理由ですが、ワークショップには7つの大学の教授が集まる予定でしたが、自分達の大学には何が必要かを考えるためでした。実際にワークショップを行った後2007年6月ですけども、7つの大学の人たちとそれに別の大学の人も加わって、引き続き討議していきたいということになりました。カナダは非常に大きい国ですので意見を言い合うためにWeb上にwikiとして作りました。それはみんなが書き込み出来て、みんなで編集していくという形です。

12枚目のスライドについてここで詳しく述べるのは避けましょう。これらについては先ほど説明したマギル大学の授業デザイン・教授法ワークショップの特徴です。大事な特徴だけ2つ申し上げたいと思います。1つは授業に関してデザインまたは再デザインを行うということと、それから共同作業を行うということ、この二つがマギル大学で開発されたワークショップの特徴です。

13枚目、14枚目のスライドは、本ワークショップが前提としている、「学問的知識と一般的な教授活動を関連づける」という仮説について説明したもの、そして人々がこれらをどう概念化するかを図示したものです。

16枚目が学習中心の教育についてと授業デザインを行う上での4つの要素間の一貫性とつながりの状態を示したスライドです。これがコンセプト・マップの例になるかと思えます。学習が中心に位置しています。そして4つの要素が周りに配置されていて、一番上が内容、学習の成果、教育方略、評価となっています。これら全てがそれぞれの大学の文脈・環境というものの中で動いているわけです。

17枚目、18枚目は、その他の仮説である「教授活動について判断する際に求められる論理的アプローチ」と「変化をもたらす学習の前提としての振り返り」です。

19枚目はカンファレンス前のワークショップの際に配布された、お知らせの中に書かれてあったものです。20枚目がカンファレンス前のワークショップに参加した7つの大学です。

**Making explicit the underlying assumptions**

1. Linking disciplinary knowledge to teaching actions (Donald, 2002; Neumann, 2001; Rowland, 1999)
2. Learning-centred teaching (Saroyan & Amundsen (Eds.), 2004)
3. Coherence and alignment of course design elements (Fields of Instructional Design and Systems Theory)
4. A reasoned approach to teaching decisions (Saroyan & Amundsen (Eds.), 2004; Shulman 1986, 1987)

17

**Making explicit the underlying assumptions**

1. Linking disciplinary knowledge to teaching actions (Donald, 2002; Neumann, 2001; Rowland, 1999)
2. Learning-centred teaching (Saroyan & Amundsen (Eds.), 2004)
3. Coherence and alignment of course design elements (Fields of Instructional Design and Systems Theory)
4. A reasoned approach to teaching decisions (Saroyan & Amundsen (Eds.), 2004; Skules 1961/1907)
5. Reflection as basic to transformational learning. (McKinnis & Weston, 2000; Cranton, 1996; Haprow, 1991; Schon, 1987)

18

**The CDTW:  
A Canadian educational development initiative**

**STLHE Pre-conference workshop, June 2007**

**Abstract**

- The one week intensive Course Design and Teaching Workshop (CDTW) was offered for the first time to faculty members at McGill University in 1993 and since then it has been offered over 20 times (Saroyan and Amundsen, 2004).
- Ten educational developers from 7 Canadian universities as well as examine the range of ways in which aspects of this workshop have been adapted to particular contexts, with extremely positive results (Simon Fraser, Concordia, Guelph, Waterloo, Wilfrid Laurier, University of Victoria).
- Participants in this session will experience the key strategies and processes that make this workshop unique (e.g., putting professors' subject matter expertise in a central position by beginning the course design process with a form of concept mapping that facilitates analysis of course content through identifying key concepts, and the relationships among them).
- Participants will be supported in the development of a course design workshop appropriate for their institutional context.

19

**Participants in  
STLHE pre-conference workshop**

- **McGill University** (Cynthia Weston and Mariela Tovar)
- **Simon Fraser University** (Cheryl Amundsen)
- **Concordia University** (Janette Barrington)
- **University of Victoria** (Catherine Caws and Geraldine VanGyn)
- **University of Guelph** (Trevor Holmes)
- **University of Waterloo** (Tracy Penny Light)
- **Wilfrid Laurier University** (Jeanette Macdonald)

20

Q14

佐藤「これらの7大学は地理的には近いのでしょうか。」

A14

ベセIAM「マギルとコンコーディアは東海岸にあります。フィルフリッドロリエとビクトリア大学は西海岸にあります。残りの3つの大学は地方になります。カナダを横断すると5000キロになりますので離れていることになります。」

Q15

佐藤「これらの大学には何か共通点があるのですか。」

A15

ベセIAM「ワークショップの共同開催という共通の興味があってここに集まったということになります。」

21 枚目にはワークショップの議題と目的を書いてありますのでご覧ください。

22 枚目には今後の課題をあげています。まず、wiki を使って情報の共有を7つの大学が始めています。23 枚目がwikiの最初のページの画像です。こちらに色々な項目が出ていますが、上から5つ目にある「世界の大学におけるCDTWの取り組み」の中に、大阪大学も私のいるローザンヌ大学も入っています。皆様の大学でも取り組めば、このカテゴリに入ります。24 枚目はwiki というものはどういうものかというアイデアを書いたものです。wiki というのはどういうものかはこれを見ていただくと分かると思います。25 枚目に出しているのが7つの大学名とプログラム名です。26 枚目に掲載されているのが、参加者がwikiの中で共有しようと合意したアイテムです。

ではこの後休憩に入りたいと思いますが、休憩の間是非質問を考えていただきたいと思います。今までの発表を聞いて、それを日本の大学ではどのように応用できるかというようなことを考えていただき、皆さんでお話しをしていただき、その考え・質問を持って後半参加してもらいたいと思います。

Q16

質問者「私はアメリカの初年次教育のナショナルセンターと関係があるのですが、同じようなことをヨーロッパの人はネットワークでやっている。予算的に厳しくカンファレンスの規模が小さくなってしまふ。また参加も限りがある。このネットワーク内でのワークショップの予算というのはどうなっているのでしょうか。」

A16

ベセIAM「ネットワーク自体の予算はゼロです。それぞれの大学の予算で運営しています。」

Q17

質問者「例えばワークショップ講師の給与は大学から出るのが、もしくは参加者達がお金を出し合ってその人たちの給与となるのでしょうか。」

**議題と目的**  
STLHE カンファレンス前ワークショップ(2007年8月)

- コースデザイン・教授法ワークショップ (CDTW) の基礎となるその起源と仮定を理解する
- このワークショップを特徴付ける主要な方略を作り、体験する
- 自分の所属機関の現場に適したコースデザインのワークショップを計画する
- カナダのいくつかの大学におけるCDTWの応用範囲についてのディスカッション

21

**次のステップ**

- 共有のためのWikiの作成
- 2007年9月に始動
- 草稿のオンライン上での公開
- 2008年STLHEにて発表予定

22

**カナダCDTWネットワーク**

ようこそCDI Wikiへ

23

**(草稿) CDI Wiki:**  
カナダ・コースデザイン・イニシアチブ

- Saroyan and Amundsen (2004)に関連するコースデザイン・イニシアチブ (CDI)によって、カナダの大学に話し合いの場とリソースへのアクセスを提供する
- コースデザインへのアプローチの基礎となる仮定と起源を明らかにする
- このコースデザインへのアプローチを特徴付ける、主要な方略を特定する
- カナダのいくつかの大学でのCDTWを実施する方法を探る
- これらのコースデザイン・イニシアチブに関する個人や集団の知識と資源を共有する

24

### Agenda and goals

STLHE pre-conference workshop (June 2007)

- Understand origins and assumptions underlying the Course Design and Teaching Workshop (CDTW)
- Model/Experience key strategies that make this workshop unique
- Plan a course design workshop for your own institutional context.
- Discuss the range of ways in which aspects of the CDTW are implemented at several universities across Canada

21

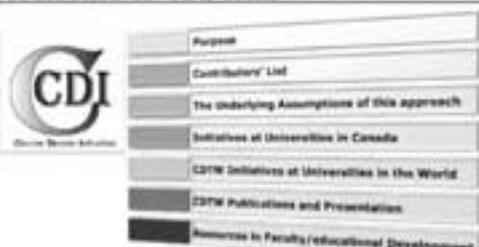
### Next steps

- Create a wiki space for all of us to share
- Began work in Sept 2007
- Draft is online
- Will be presented at STLHE 2008

22

### The Canadian CDTW Network

Welcome to CDI Wiki



Purpose
Contributors' List
The underlying Assumptions of this approach
Initiatives at Universities in Canada
CDTW Initiatives at Universities in the World
CDTW Publications and Presentations
Resources in Faculty/educational Development

23

### (Draft) CDI Wiki: A Canadian Course Design Initiative

- To provide a forum and access to resources for Canadian Universities with a course design initiative (CDI) related to Saroyan and Amundsen (2004)
- To make explicit the origins and assumptions underlying this approach to course design
- To identify key strategies that make this approach to course design unique
- To explore the range of ways in which aspects of CDTW are implemented at several universities across Canada
- To share individual and collective knowledge and resources about these course design initiatives (CDI)

24

A17

**ベセIAM** 「私の場合、大学から出ています。大学のほうで予算を組んでおりまして、参加者から参加費を取るということはありません。そこで働いている私が10回ワークショップを行おうが25回行おうが私の給料は変わりません。もう少し具体的な例を申し上げますと、スイスには4つフランス語を教える大学があります。その大学が連携してまして、それぞれのファカルティ・ディベロッパーの時間の10%はこのワークショップに費やそうということになっていますので、私はその分の時間を使います。なのでネットワーク自体の予算はありません。」

Q18

**佐藤** 「マギル大学の授業デザインワークショップを基にして、各大学で実施されていると思うのですが、どの程度内容が7つの大学によってアレンジされているのかお聞きしたいです。」

A18

**ベセIAM** 「例えばマギル大学ですとワークショップは5日間のコースですが、3日間で行っている大学もあれば4日間で行っている大学もあります。それぞれニーズによって開催の日程を変えています。そして期間が違うという以外に頻度の違いがあります。例えばマギル大学ですと、年間3〜4回ワークショップを行っておりますが、それほど頻繁に行っていない大学もあります」

Q19

**佐藤** 「そうすると5日間というのはかなり長いほうだと認識してよろしいですか。」

A19

**ベセIAM** 「マギル大学では大学全体のFDのポリシーに基づいてワークショップを行います。同時に大学の管理職が、大学においては『学習』というものが大事であり、それがどういったものを学ぶ必要があるということ、教員に伝え、促していくという活動を行っています。このようにマギル大学には教育と学習に対するポリシーがありますから、5日間というのは非常に歓迎されて良いわけです。ただしそういったポリシーがない大学にとって5日間というのは長すぎるわけで、2日間でも十分だという考えがあります。ですから、マイクロレベル（個々人の活動を支えるもの）の活動とそれを支えるマクロレベル（組織全体、ポリシー）の活動の両方の存在が必要なわけです。」

#### 4. ネットワークとしての活動

7つの大学が同じ知識を共有して1つのネットワークを作ったわけです。これからはFDのネットワークで何ができるか、FDネットワークとはどういったものかをお話したいと思います。先ほど申しあげましたようにここでみるのは、なぜネットワークが必要なのかの「なぜ」ということ、それからネットワークはどのようにして運営されているか「どういう風に」ということをお話した後いくつかの例を具体的に申しあげたいと思います。それらをお話することで「ああそういうことであつたならば是非うちでも取り入れたい」というように皆様に思っただけきけるようにお話していきたいと思ひます。

ではなぜネットワークとして活動するかということですが、それは「FD活動の影響を高めるために資源を蓄積する」というためです。つまり、より多くの大学教員がCDTWに参加しやすくなるということは、量的に参加する数が増えますので量的な影響が出てくるわけです。つまり1人がワークショップを1回行うとしますと1回しか機会がないわけですが、5大学で5人がそれぞれ違う時期にワークショップを行うとすれば、一教員にしてみれば違ったワークショップに出かけていくチャンスが増えるわけです。

今申しあげましたのは数を増やすことで影響を高めようという話しでしたが次に地理的な影響というものがあります。異なった場所でチャンスを増やすことによって資源を増やすことができる。例えば大阪・京都・名古屋・愛媛で介入を増やせばそれだけFDへの介入が広がっていくこととなります。日本の状況についてはよく分からないので他の国の状況で言いますと、学長というのは他大学がどういふ風にやっているかに非常に興味があるようです。他の大学が全てやっているのであれば、自分の大学でやらないうけにはいかない。他大学ではFDもやっているのであれば、うちも当然やりましようという話しになるのです。

もう1つの理由ですが、FDの活動の質を高めるという質的な変化があります。FD活動の質の向上といふば多様性を求めるということが言えると思ひます。例えば専門知識の多様性、アセスメントの専門家、教授方略の専門家などがあると思ひます。それらを連携させることによってそれぞれのFDの質を高めていくという多様性があります。次にもう1つ重要な視点としてFDに対する考え方を多様化するということがあると思ひます。FDについて他の人はどう考えているのかということを担当者が考えるようになるのです。

私がFDをやる際にどういふ風にするかという、必ず

**カナダの大学における取組**

- マギル大学 - コースデザイン・教授法ワークショップ
- コンコーディア大学 - 大学教員のためのコースデザイン
- サイモン・フレージャー大学 - 教授法再考
- ビクトリア大学 - コース再デザインワークショップ
- ウォータールー大学 (Tracy Penny Light) - ティーチング・エクセレンス・アカデミー
- ウィルフリッドロリエ大学 (Jeanette Macdonald) - コース再デザイン研究会
- ギルフ大学

25

**提示された情報**

- イニシアチブ(ワークショップ)の要約
- ワークショップのスケジュール
- ワークショップで使用されたスライド
- バインダーやオンライン上で配布・公開された資料
- 参考文献
- ウェブのリンク

26

**カナダCDTWネットワーク**

質問は?

27

**ネットワークとしての活動**

なぜ?

- FD活動の影響を高めるために資源を蓄積する:
  - より多くの教授陣がCDTWに参加しやすくなる(量的影響)
  - 異なる機関への同時的介入を促す(地理的影響)
- FD活動の質を高める:
  - ファカルティディベロッパーの専門知識を多様にする
  - FDに対する考え方を多様にする(FD自身についての振り返り)

28

## Initiatives at Canadian Universities

- McGill University - Course Design & Teaching Workshop
- Concordia University - Course Design for Professors
- Simon Fraser University - Rethinking Teaching
- University of Victoria - Course ReDesign Workshop
- University of Waterloo - Teaching Excellence Academy
- Wilfrid Laurier University - Course ReDesign Institute
- University of Guelph

25

## Information posted for each

- Summary of the initiative (workshop)
- Workshop schedule
- Slides used during the workshop
- Materials distributed in binders or online
- Readings
- Link to the website

26

## The Canadian CDTW Network

Questions?

27

## Working as a network

### Why?

- Pooling resources to increase the impact of FD activities:
  - Allows for more professors to participate in CDTW (demographic impact)
  - Allows for simultaneous intervention in different institutions (geographic impact)
- Increase richness of FD activities:
  - Diversity of expertise of faculty developers
  - Diversity of views of FD (more reflection on FD)

28

協同授業 (co-teach) をしております。協同して教えあうということ、つまり同僚が私が教えるのを見ていまして、私の教授活動に関してノートを取っています。教え終わった後に批評的なフィードバックを私にくれます。それを受けて私は成長していくわけです。これを相互に行っています。7つの大学が行っているネットワーク活動は、私が個人的に行っているものと同様なことをもう少し大きな枠で行っていると言えます。つまりそれぞれの大学がそれぞれのプログラムを持って行っているのですが、各大学はそのプログラムに対してコメントを述べてフィードバックを与え合うという形で行っています。

では、ネットワークが「どのように」活動しているのかという話をしていきたいと思います。これは私が色々なネットワークに参加しているので、それらの様々な経験に基づいて話したいと思います。

まず1つ例を申し上げます。スイスにあるフランス語を話す大学なのですが、10年ほどたっている大学ですけども、ここで議論が起こっています。その議論というのは、実際に今ネットワークが必要かどうか、ネットワークに入るべきかどうかというものです。ここで皆さんが考えるであろう質問を投げかけたいと思います。

皆さんの大学にはFDに対する方略というものをお持ちでしょうか。FDのネットワークに対する方略があるかどうかということが1点。それから2点目は、そのネットワークというものが皆様の大学に合うか合わないかということです。価値があるものか価値が無いものか。学長がFDを気に入っているかどうかということは非常に重要な問題でありまして、もし学長がそれをサポートするようであったら皆さんは活動を伸ばしていくことができるわけですけども、もしそうでないと活動が思う存分できないということになりますので実は重要な問題なのです。

次に皆さんのファカルティ・ディベロッパーとしてのご自身のFDに対する概念あるいはアプローチを明確にしてみてください。それはどういうものかを考えてください。教え方を教える必要があるというコンセプトがあるとします。一方で、参加する人にどんな教え方が好きか聞いてみるころから始めるというコンセプトもある。その2つは相容れるものではないということになります。

次にそのネットワークの目的が大事です。それといつからネットワークに参加するか、あるいはどのくらいの期間そのネットワークを維持していくべきか、タイムラインを考えること。ネットワークを作るということは共同で作業をし、共同のプログラムを作るということ、そして皆さんがファカルティ・ディベロッパーとしてそれぞれの職業的な発展のために役立つという側面もあります。

次に重要な質問ですが、皆様はそれぞれどういった資源を提供することができるかを考えてみてください。人は何人くらい、時間はどの程度費やすことができるか、お金は必要か、必要であればどのくらい必要か、そして場所を提供することが可能か、例えばワークショップを行う場所を提供することが可能でしょうか。

このようにして、授業デザインのワークショップを一緒に開催していく目標を共有することができるかどうかを決定する必要があります。

ネットワークについて個々に話を深めていく前に、ネットワークについて一般的な質問として何かあればこちらでお伺いしたいと思います。

**Q20**

**質問者**「質問したいのはネットワークの大きさの問題です。カナダのネットワークは比較的小さなネットワークでしたから相互に密なコミュニケーションが取れる。けれどもネットワークによっては例えば30とか40だとかあるいは100だとか大きなネットワークを組んだりするとなかなか密に連携が取れなくなったりとか色々思うのですけれども、そういう意味でネットワークを組む場合、適正な規模というものをご検討いただけますか。」

**A20**

**ベセリアム**「規模は目的によりますね。共同で何か物事を行い、密に何かしようとする密なネットワークのほうが有利であります。一方、実践を相互に交換するということであると、これは関与のレベルがあまり高くありませんので、大きなネットワークでよいと思います。もう1つ別の言い方をしますと、小さなグループですと共通事項を多くもっている必要があり、大きなグループになりますとそれほど多くなくてもよいと言えます。」

**Q21**

**質問者**「今の質問に関連するのですが、このネットワークは7つの大学だったと思うのですが、例えばそのネットワークが開催するカンファレンスとか研修会に、例えばカナダのケント大学やトロント大学が参加することも可能なのですか。それとも7つの大学だけのクローズされたネットワークなののでしょうか。それによってネットワークの意味が全然違ってくると思うのです。」

**A21**

**ベセリアム**「今お話ししている7大学のネットワークに関しては閉じたネットワークです。なのでこの7大学が開催するワークショップについては参加者のみが参加することになります。一方後ほど申しますけれども、ケント大学やトロント大学などが参加する非常に広いネットワークもあります。こちらは7つの大学が共有している関心ほど濃密なものではないもので連携しています。付け足しをしますと、1つのネットワークに入るか入らないかという問題ではなくて、例えば1つのネットワークの中にサブネッ

**ネットワークとしての活動**

なぜ?

- FD活動の影響を高めるために資源を蓄積する:
  - より多くの教授陣がCDTWに参加しやすくなる(量的影響)
  - 異なる機関への同時的介入を促す(地理的影響)
- FD活動の質を高める:
  - ファカルティディベロッパーの専門知識を多様にする
  - FDに対する考え方を多様にする (FD自身についての振り返り)

28

**ネットワークとしての活動**

どうやって?

- あなたの機関のFDの方針を明確にする
- あなたのFDの概念/アプローチを明確にする
- 協同で取り組むことに対する期待を明確にする
  - あなたの組織の文脈におけるCDTW活動の目的
  - CDTWのスケジュール(頻度、時期)
- あなたが貢献できる資源を明確にする(人、時間、予算、場所)
- CDTWを協力して行えるだけの共通点をもっているか明らかにする

29

**ネットワークとしての活動**

質問は?

30

**世界のFDネットワーク**

公式なネットワーク:

- 英国:
  - スタッフ・教育開発学会 (SEDA)
- 米国:
  - 高等教育職業能力・組織開発ネットワーク(POD)
- オーストラリア/ ニュージーランド:
  - オーストラリア高等教育研究開発学会(HERDSA)
- スイス:
  - スイスFDネットワーク (SFDN)

31

**Working as a network**

**Why?**

- Pooling resources to increase the impact of FD activities:
  - Allows for more professors to participate in CDTW (demographic impact)
  - Allows for simultaneous intervention in different institutions (geographic impact)
- Increase richness of FD activities:
  - Diversity of expertise of faculty developers
  - Diversity of views of FD (more reflection on FD)

28

**Working as a network**

**How?**

- Clarify your institutional strategy towards FD
- Clarify your own conceptions of / approaches to FD
- Clarify your expectations of the joint endeavour
  - Purpose of CDTW activities in your context
  - Timeline of CDTW activities
- Clarify the resources you can contribute (people, time, money, physical space)
- Determine if you have enough in common to go ahead with the joint delivery of CDTW

29

**Working as a network**

**Questions?**

30

**Some FD networks around the world**

**Formal networks:**

- United Kingdom:
  - Staff and Educational Development Association (SEDA)
- United States:
  - Professional and Organizational Development in Higher Education (POD)
- Australia and New Zealand:
  - Higher Educational Research and Development Society of Australasia (HERDSA)
- Switzerland:
  - Swiss Faculty Development Network (SFDN)

31

トワークを作っていくというような段階的な捉え方も実際あります。スイスでは今1つのサブネットワークを作ろうという方向に動いています。」

Q22

**質問者**「研修を受けた人に対して、7つの大学で共通の修了証を出していますでしょうか。あるいはそれが将来的にイギリスのPGCHEに発展する可能性も含んでいるのでしょうか。」

A22

**ベセIAM**「『参加しました』という意味の修了証は出しますが、英国で実際行われているようなPGCHEに発展していくようなものではありません。」

Q23

**質問者**「日本ではFDネットワークの形成に行政が関与していますが、カナダではそういったことはないという風に私は理解しているのですが、それは正しいのでしょうか。」

A23

**ベセIAM**「イエスとノーと両方の答えになってしまいます。どうしてかというと、日本では教育に関しては国の文部科学省が1省で担当していますが、カナダについては教育というものは州ごとに管轄しておりますので12の省が担当しているということになります。ですので、連邦政府が一旦教育システムを改革しようとなりますと、各州の教育省がそれぞれ共同して一緒にやっけないといけないということになりますけども、そうでない場合はそれぞれがバラバラに州が活動するということになります。」

Q24

**質問者**「各州の連合体みたいなものがあって意思表示をしているのですか。」

A24

**ベセIAM**「カナダでは州を越えて連携するということは非常に難しいのです。例えばケベック州の人がヨーロッパに留学するほうが、オンタリオ州で学ぶよりも簡単なわけですね。それだけ州によって違うということです。非常に残念なことだとは思いますが、現実カナダではそういう感じですよ。」

## 5. 世界のFDネットワーク

それではファカルティ・ディベロップメントのネットワークの例をみていきたいと思いますが、まずフォーマルなネットワークのお話しをして、その後インフォーマルなネットワークのお話しをしたいと思います。その両方をお話しすることによって皆さんが自分達のネットワークを考えるとときに、自分たちのシナリオをどうしようかと考えていただけるようにお話ししたいと思います。

最も公式なネットワークの中で古いものといえば、皆さんもご承知だとは思いますが、英国のSEDAというスタッフ・教育開発学会というものがあります。これが1番古いネットワークだといえるのは、名前から見ても分かると思います。つまりFDの呼び方としてヨーロッパで使われているのが教育開発(エデュケーション・ディベロップメント)というものですし、それからスタッフ・ディベロップメントという言い方もヨーロッパでの呼び方であり、この学会の目的というのは、ファカルティ・ディベロッパーを作っていく実践できる人を育てていくことです。この学会のネットワークの活動としましては、出版を行う、会議を行うということも挙げられますし、技術的なスキルを認定するということが挙げられます。SEDAのフェローになるためには、SEDAが開催しているいくつかのステップを習得して認定されることが必要です。今日は文脈や環境が大事ということを申し上げていますが、それは例えば英国についてもそうです。英国では大学教員を助ける人、マネジメントする人など色々なサポート役がいるという状況です。

Q25

佐藤「『認定』と言われましたが、それは何に対する認定なのですか？」

A25

ベセアム「皆さんご承知のように英国というのは認可の国ということになりまして、何に対しても英国人は認定されます。例えば建築を行う人であれば、建築協会から認定をもらって、その証明書にはフェローですと書かれているわけです。協会がフェローの認定を出すためには、その協会が認定されるプログラムを持っていないといけないということになりますので、プログラム自体が認定されているということになります。英国でいいますと高等教育アカデミーというのがありまして、これは政府の機関ですけども、そこがプログラムを認定します。例えばPGCHEですと、先生を認定しますということで認定が出るわけです。SEDAの件で言いますと、FDに関して認定されるプログラムを持っているか持っていないかということで、ある人はもう認定されているけれども別の人はプログラムを修了していないので認定されていないという違いが出てきます。」

### 世界のFDネットワーク

非公式ネットワーク:

- カナダ:
  - 高等教育教授・学習学会 FD委員会 (STLHE)
- フランス、ベルギー、カナダ、スイス(フランス地方):
  - 国際教授・学習学会 FD委員会 (AIPJ)
- ドイツ:
  - 様々な地域に非公式なネットワークが存在している

32

### 世界のFDネットワーク

これらのネットワークの目的:

- 実践と学習の場としてのFDの振り返り
- FDのアプローチに関する共通理解の向上
- 経験の共有(良い成功した実践例)
- 共同開発(リサーチや実践)
- 高等教育機関や政府への働きかけ
- 教育開発国際コンソーシアム(ICED)を通じて、FDを世界的に発展させる
  - 国際アカデミック・ディベロップメント・ジャーナル(IJAD)
  - 隔年のカンファレンス (June 10-14, 2008 in SLC/USA)

33

### 世界のFDネットワーク

質問は?

34

**Some FD networks around the world**

**Informal networks:**

- Canada:
  - FD caucus of the Society for Teaching and Learning in Higher Education (STLHE)
- France, Belgium, Canada, Switzerland (French parts):
  - FD caucus of the Association internationale de pédagogie universitaire (AIPU)
- Germany:
  - Informal networks by region (Länder) across the country

32

**Some FD networks around the world**

**Purpose of these networks:**

- Reflect on FD as a field of practice and study
- Improve common understanding of FD approaches
- Share experiences (best/successful practices)
- Develop joint endeavours (research or practice)
- Lobby HE institutions or government bodies
- Developing FD worldwide through the International Consortium for Educational Development (ICED)
  - International Journal of Academic Development (IJAD)
  - Biennial conference (June 10-14, 2008 in SLC/USA)

33

**Some FD networks around the world**

Questions?

34

026

**佐藤**「認定はファカルティ・ディベロッパー個人に対して行われるということですね。つまり認定済のファカルティ・ディベロッパーと認定されていないファカルティ・ディベロッパーがいるということですか。」

A26

**ベセIAM**「その通りです。別にそこで競争しているとかそういうことではないです。」

次にアメリカの例ですけど、全く認定は無しということに単に職業的に興味を共有する人達が集まっているネットワークというものがあります。このアメリカのネットワークは、高等教育職業能力組織開発ネットワーク (POD) ですが、これもかなり古いネットワークだと思います。これはやはり名前に表れておまして、専門能力開発と組織開発という2つの開発 (ディベロップメント) という名前が付いていますが、この2つが入っているということは古いということを示しています。これらの中にFDが含まれております。このPODも先ほどSEDAと同じ様に活動を様々行っておりまして、例えばワークショップを開催する、出版を行う、ネットワークの中にネットワークを作っていくといった活動を行っています。

この2つの公式なネットワークがディベロッパーの職業的な発展に寄与し能力の向上に努めています。

次にオーストラリアとニュージーランドで行われているネットワークですがこちらのほうが日本に近いかなという風に考えております。それはオーストラリア高等教育研究開発学会 (HERDSA) として、これはオーストラリア、ニュージーランドの高等教育研究者が共同で作っているネットワークです。こちらでは実践と研究の両方を行っています。こちらの良くない点というのは、実践者は研究者のことを理解していないし、研究者は実践者のことを理解していないということです。ですがこのネットワークもカンファレンスを開催していますし、ニュースレターも出しておりますし、学会誌も出版しております。

もう1つ付け加えたいのが、スイスのネットワークです。このスイスのネットワークを付け加えたい理由というのは、ごく最近作ったものだという事です。ここでスイスの高等教育の状況についてお話したいと思います。それをお話することによって皆さんがよく文脈を理解できるのではないかと考えます。スイスは12の県のような自治体に分かれています。教育はそれぞれの県に管轄されています。国全体には10の大学があります。ということは、ある県には大学がありますが、大学がない県も存在します。そのほかに10の専門大学があります。例えば教育専門大学や芸術専門大学というものです。つまり全体で20から24の高等教育機関が存在するということになり、その中

でフランス語・ドイツ語・イタリア語それぞれの言語が話されています。

スイス FD ネットワーク (SFDN) というのは、全ての高等教育機関が FD を軸にネットワークを構築しています。当初はいわゆる大学に所属する FDer たちでのみ構成されていました。ですが現実的にはある FDer が大学から専門大学へ移動するということがありました。大学の FDer だけに限定しておくというのには限界がありましたので、参加者の条件を変えてみたわけです。どこで働いている FDer かという捉え方から、あなたはどんな FDer ですか、FDer として何を行っていますかという視点に変えました。今回の会議では、これまで 25 人だったメンバーが 75 人になることになります。ですが先程申し上げましたようにネットワークの中でサブネットワークを構築していくということが可能ですので、大きなネットワークは外側の 1 番大きなネットワークとして機能するわけで、その大きなネットワークの中にドイツ語を話す人達の小さなネットワークがあったり、フランス語やイタリア語といったサブネットワークが機能していくことになります。同様に大きなネットワークの中に古い大学のネットワーク、新しい大学のネットワーク、ポリテクニック大学のネットワーク、応用科学大学のネットワーク、芸術大学のネットワーク、教育大学のネットワークというサブネットワークが出来てきます。そのような状況の中で小さいネットワークが実際に共同で作業して何かに取り組むというのが実際の機能を果たし、大きいネットワークとしては小さいネットワークの中に所属する人達が集まる場を提供して FD としての活動を推進していくことになります。場の提供というのが主な機能になります。これを日本の場合において考えてみますと、例えば日本中全国のネットワークを作るというのが 1 つ考えられるでしょうし、その中に地域別のサブネットワークも考えられるでしょう。それから例えば国立大学のネットワークとか私立大学のネットワークといったように、日本国内の中でも様々なサブネットワークが考えられます。

今お話したのが公式なネットワークということですが、これからお話するのは非公式なネットワークです。ここで非公式なネットワークの 1 つの例として先程すでにお話ししましたが、カナダの高等教育教授・学習学会 (STLHE) というネットワークです。カナダの中でも教育に興味がある大学教員と FD 担当者が集まってこの団体を作ったわけですが、その中でフォーカスという小委員会がそれぞれ作られていきました。STLHE は毎年年次会議を開催するわけですが、その前日か開催後の日に、FDer が集まって会議を開きま

す。今申し上げましたのが、FD の情報交換の 1 つの例でありますけども、そのほかに例えば Web 上での情報交換というのも可能になると思います。他大学はどんなことをやっているのだろうかについて情報交換することも可能です。

その他の非公式なネットワークとして、フランス語を話す人達の FD ネットワークというのがあります。つまりフランス本国、カナダのフランス語圏、スイスのフランス語圏の FDer ネットワークがあります。このフランス語を話す人達のネットワークというの、カナダの非公式なネットワークと同様なのですが、もともと大学教員で教育に興味があるという人達の大きなネットワークの中で、FD に興味ある人達がさらに小さなグループを形成して行って、その人達が高等教育についての話し合いをするために大きな会議が行われる際に小さな会議を開催していくというのをしております。ここで面白いのは、このグループメンバーたちを結び付けているのは言語ということですね。言語が共通であるという要素によってネットワークが成立しています。つまり FD の背景にしてもそれぞれ様々なわけですね。今日午前中に申し上げましたが、フランスというのは大学教育の点で言えば、遅れているという分類に入ります。それでも言語が共通ということで 1 つのネットワークに入っているわけです。面白いのはフランス語を話す人達の会ということで国際的な広がりを持っています。例えばモロッコ、アルジェリア、チュニジア、ベトナムにもフランス語を話す人達がいます。今申し上げましたような国々は確かにフランス語を話していますが、ファカルティ・ディベロッパーはまだ存在しませんのでまだ参画はしていません。

ここでもう 1 つ非公式なネットワークの例として挙げられるのがドイツの例なのですが、このドイツの例も先程お話したカナダとスイスと似通ったところがありまして、というのも教育の権限が連邦政府ではなく各州、各県にあります。したがってドイツの中では地域的なつながりが強い近くの大学とネットワークを作っているということです。たまたま別の大学の FDer を知っていれば話をすることがあるでしょうが、そうでない限りネットワークというのは地理的に近い人達が集まって作るわけです。

最後に、FD のネットワークを作る目的について皆さんもご自身のことを考えていただきたいと思うのですが、まずは実践するフィールドあるいは研究のフィールドとして FD を考えることができるかどうかを考えてみてください。

そしてFDのアプローチに関する共通理解の向上ということです。FDのアプローチについて理解を高めようということ意識してみてください。

次に経験を共有するということが挙げられます。一番良かった実践は何だったか、去年一番上手くいったのは何だったかという事例をみんなで共有し合うことも目的になります。

その他、一緒に共同のプロジェクトを行う。実践でも研究でも共同のプロジェクトを行うというのがあります。

また政府や高等教育機関に対してロビー活動を行うことができます。FDネットワークの代表として皆さんの意見を述べるとすると、個人が発言するよりも、大きな力を持った働きかけとなります。

FDの国際的な発展ということで、教育開発国際コンソーシアム(ICED)を発展させていくこともできます。ICEDは会議も開催しますし、学会誌も発行しています。皆さんがネットワークの一員となりましたら、学会誌を会員価格で手に入れることができるというような特典もあります。ICEDは2年に1回会議を開催しておりまして次の開催は今年の6月アメリカのソルトレイクシティで行われます。この会議には世界中からFD担当者が集まりFDに関する考え方について議論します。皆さんがもし参加されますと新しい考えを手に入れることができるのではないかと思いますし、新しい考えを得ればそれをテストしてみることもできるでしょう。あるいは様々な情報を入手することによってそれがどのようにFDに影響を与えているかというようなことを学ぶ事ができるでしょう。皆様ネットワークを構築される際にこのICEDは色々役に立つと思います。ICEDの小委員会も皆さんの助けとなるでしょうし、今回6月に行うソルトレイクシティで行われる国際会議に是非皆さんのネットワークから1人でも2人でも代表を送られたらいいじゃないかと思います。そうすると会議がどういう風に進んでいるか、国際的な視野で見たFDというものはどういふものか是非日本の代表としてどなたか行かれたらいいのではないかと考えます。

ご質問があれば承りますし、また今後皆さんが日本でネットワークを構築していくということを考えると、どういふ風なネットワークがいいか何か提案はないか、あるいは質問がないか色々な点からコメントをいただけたらと思います。

Q27

**質問者**「FDネットワークのガイドラインやネットワークのメンバーリストがあればどういふものを作っているのかということを知りたいのですが。」

A27

**ベセIAM**「Webサイトにリストがあると思います。ICEDのリストもあると思いますけども全部で多分27くらいの国々が参加したのではないかと思います。はっきりしたアドレスはここでは分からないのですがグーグルでICEDと入れていただければそのHPが出ると思いますので、リストを確認できるかと思います。」

Q28

**質問者**「先生に世界中でレクチャーしていただくのはあまりにも負担になると思うので、これだけネットワークがあれば、今日のような話を配信して情報を伝えた方がいいのではないかと思います。あえてこのように講演という形でいかないといけない、こういう部分は伝わらないという部分を感じる事があれば、使い分けはどのようにされているのでしょうか。」

A28

**ベセIAM**「ネットワークの利点と不利益というものをそれぞれ考えていく必要があるのではないかと思います。ネットワークを構築することによって何が得られるかという利点をまず考えてみて、同時に不利益というのも考えてみる事が大事でしょう。そしてもし皆さんがプロジェクトを組んで行うという考えを既にお持ちであるならばそれを助けていくのは非常に喜ばしいことだと考えます。1人のFDerが大学の中で孤立してネットワークを持っていないという状況にあるならば、ネットワークに参加して世界で活躍している専門家を招いて新しいアイデアを入手することが可能になります。」

Q29

**質問者**「僕はメディアを使えばコミュニケーションもできるし、わざわざ出かける必要はないのではないかと発想で質問しているのです。」

A29

**ベセIAM**「今のアイデアは先程申し上げたICEDが担当して広げていけるのではないかと思います。私個人としては、今日はこちらの方にお招きいただきましたのでお伺いしてお話をさせていただいていますが、その考えはICEDには伝えますが彼らにそれは任せたいと思います。」

# ファカルティ・ディベロッパー 養成講座Ⅱ

Seminar for Faculty Developers Ⅱ

「海外におけるFDネットワークの取組み」



FD担当者の研修の場、それが本講座です。

今回の講座では、FD担当者(ファカルティ・ディベロッパー)のネットワーク化を  
テーマに、海外の先進事例を学びます。

FD担当者同士の繋がり、連携を求めるあなたの参加をお待ちしています!(通訳がきます。)

2008年 **3月25日** **火**

13:00~16:15

愛媛大学 城北キャンパス 共通教育講義棟北別館22番教室

## 講 師



### Denis Berthiaume (デニス・バーシャム)

スイス・ローザンヌ大学  
学習・教授センター長

7年間に渡って、世界各国の研究大学(カナダ・マギル大学、イギリス・サウスアンブロン大学、フランス・ブルゴーニュ大学、大阪大学)においてファカルティ・ディベロッパーとしてFDに関わる。現在、ローザンヌ大学学習・教授センター長として、学内教員向けのコンサルテーション、成績評価に関わるセミナーの企画・実施、教授・学習に関わる研究プロジェクトの立ち上げを行い、全学的な教育評価システムの責任者などを務めている。スイスFDネットワークの副代表(次期代表)も務める。今回は、カナダやスイスにおけるFDネットワークの実態について紹介していただきます。

## 参 加 費

**無料**

※情報交換会に参加される方は4,000円を当日お支払いいただきます。

## 参加対象者

各大学でFDを担当されている教職員(ファカルティ・ディベロッパー)

定員: **30名**

※先着順となります。

参加者には  
愛媛大学オリジナル教材  
『FDハンドブック第1～3巻』+  
『FD担当者必携マニュアル  
第2巻』を差し上げます。



※『FD担当者必携マニュアル 第2巻』は後日発送いたします。

※実物のデザインとは異なります。

## スケジュール

3月25日(火)	12:30	受付
	13:00	開会式
	13:30	講演・海外におけるFDネットワークの取組み(通訳あり)
	16:15	閉会式
	17:00	情報交換会開始(夕食つき)
	19:00	情報交換会終了

## お申し込み・お問い合わせ

お申し込みの方は、下記フォームにご記入の上、3月17日(金)までに事務局へお送りください。

お問い合わせにつきましても、事務局までメールにてご連絡ください。

制限人数に到達次第締め切りますので、お早めに申し込みください。

講座の内容についての問い合わせなどもお気軽にお尋ねください。

事務局メールアドレス = [info@iec.ehime-u.ac.jp](mailto:info@iec.ehime-u.ac.jp)

メール件名 = FDer講座申し込み(名前〇〇〇)

- ・お名前
- ・電話番号(選別等、緊急用なのでできれば携帯)
- ・年齢
- ・性別
- ・メールアドレス

- ・ご住所
- ・ご所属(センター、学部等までご記入下さい)
- ・所属先での活動内容と自分の役割  
(これまでFD担当者として活動した経験をお教えてください)
- ・今回、学びたいこと、得たいこと

※いただいた情報は本講座用にしか使いません。

**事後アンケート項目（日本文）**  
**ファカルティ・ディベロッパー養成講座Ⅱ 評価・フィードバックアンケート**  
**愛媛大学 2008/3/25**

講座のどの部分が有用であったかを次のスケールを使って、（ ）内に数字を記述してお答え下さい。

（ ） 1＝全く有用でない 2＝少しだけ有用 3＝まあ有用 4＝かなり有用 5＝非常に有用  
※ここで「有用 (useful)」とは、あなた個人にとって、あるいはあなたの大学にとってという意味です。

今回は海外におけるFDネットワークの取組みについて講座を開催しました。

1. カナダマギル大学での教員向け授業デザインワークショップの内容の事例説明は有用でしたか？

（ ） 1＝全く有用でない 2＝少しだけ有用 3＝まあ有用 4＝かなり有用 5＝非常に有用

2. カナダの7つの大学からなる授業デザインワークショップに関するネットワークの事例説明は有用でしたか？

（ ） 1＝全く有用でない 2＝少しだけ有用 3＝まあ有用 4＝かなり有用 5＝非常に有用

3. FDをネットワーク化する理由とその実施方法のコツについての説明は有用でしたか？

（ ） 1＝全く有用でない 2＝少しだけ有用 3＝まあ有用 4＝かなり有用 5＝非常に有用

4. 諸外国のFDネットワークの事例説明は有用でしたか？

（ ） 1＝全く有用でない 2＝少しだけ有用 3＝まあ有用 4＝かなり有用 5＝非常に有用

5. 全体を通して、有用だったこと、発見したこと、気づいたこと、決意したこと、行動に移したいと思ったことは何でしたか？

6. 全体を通して、もっと知りたかったこと、知りたくなったことは何でしたか？

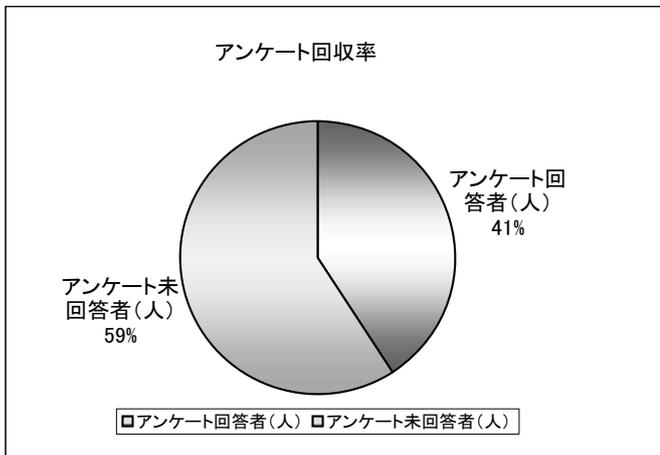
7. 講座の運営について、改善できる点にお気づきでしたら教えてください。

8. 今後、ファカルティ・ディベロッパー講座で学びたい内容がありましたらお書き下さい。

お疲れ様でした。アンケートに回答いただき、誠にありがとうございます。

## ファカルティ・ディベロッパー養成講座Ⅱ アンケート集計結果

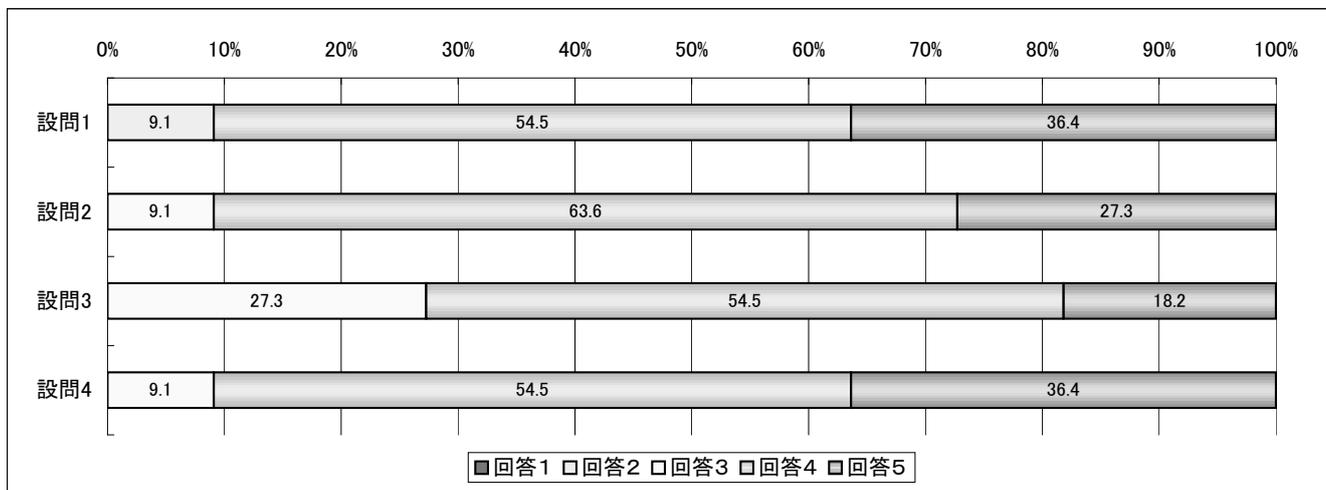
講座参加者(人)	27
アンケート回答者(人)	11
アンケート未回答者(人)	16
回答率(%)	40.7



設 問		回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	無記入	合計
設問1.カナダマギル大学での教員向け授業デザインワークショップの内容の事例説明	(人)	0	1	0	6	4	0	11
	(%)	0.0	9.1	0.0	54.5	36.4	0.0	100.0
設問2.カナダの7つの大学からなる授業デザインワークショップに関するネットワークの事例説明	(人)	0	0	1	7	3	0	11
	(%)	0.0	0.0	9.1	63.6	27.3	0.0	100.0
設問3.FDをネットワーク化する理由とその実施方法のコツについての説明	(人)	0	0	3	6	2	0	11
	(%)	0.0	0.0	27.3	54.5	18.2	0.0	100.0
設問4.諸外国のFDネットワークの事例説明	(人)	0	0	1	6	4	0	11
	(%)	0.0	0.0	9.1	54.5	36.4	0.0	100.0

※回答について

1.全く有用でない 2.少しだけ有用 3.まあ有用 4.かなり有用 5.非常に有用



ファカルティ・ディベロPPER養成講座Ⅱ アンケート記述欄

NO	設問5.全体を通して、有用だったこと、発見したこと、気づいたこと、決意したこと、行動に移りたいと思ったことは何でしたか？	設問6.全体を通して、もっと知りたかったこと、知りたくなかったことは何でしたか？	設問7.講座の運営について、改善できる点にお気づきでしたら教えてください。	設問8.今後、ファカルティ・ディベロPPER講座で学びたい内容がありましたらお書き下さい。
1	「研修ではなくリアクション」という言葉。各国のネットワークの特徴がわかったこと。日本でもFDerによるFDerのためのネットワーク作りに関与したいと思いました。	知りたいと言うよりは疑問点ですが、マギル大学のプログラムは、冗長とも見えて、あの内容なら5日も必要ないのではと思っただけです。	いつも準備や参加者への配慮がすばらしく、手本にさせてもらっています。	ディベロPPER自身の能力開発に関連するものに興味があります。話し方、ファシリテーションなど。
2	FDをうまく機能させるには、各大学の状況にあわせたlocalizationが肝になると思います。参加者が自分の教育活動について自然に振り返り気づくような、learner-centeredのプログラム設計を意識して、本学のFD活動に取り組みたいと思います。	私の勉強不足もあるのですが、海外の大学においてFDがどのくらいの温度(熱量)を持って取り組まれているのかわかりませんでした。日本では大学院でのFDが義務化されたことがきっかけとなり、各大学力を入れて取り組んでいるようになったかと思うのですが、海外においては日本のように外的要因があつたのか、それともあくまでも自発的なものなのか、それであればそのきっかけはどのようなものであつたのかを知りたいと思います。	佐藤先生をはじめ、スタッフの皆さんがとてもしっかり連携されており素晴らしいと感じました。ありがとうございました。	FDをポジティブに広めていくための方法、等
3	日本の状況を客観的に俯瞰できたこと。特にイギリスの状況が特殊であることが確認できたこと。	FDERの位置付け、待遇、評価等と今後の展望	大変充実していました。ありがとうございました。	
4	本学においては、FDに大いに関心をもつ教員が存在する一方で、全く関心を寄せない教員がいることも事実です。ネットワークを構築する以前の問題ですが、本学においてFDへの関心を高めてもらうということに、まずは取り組みたいと思います。	過去の講座で明らかになっていることなのかも知れませんが、初めて参加した私にとつては、コースデザイン・教授法ワークショップ(CDTW)による効果をどのように測るのか、ワークショップに参加した教員の授業を授けることにより学生はどのように変化するか(あるいはどのように変化したのか)、について、もっと知りたかったというのが正直な感想です。マギル大学等において、新任教員は別として、従来から大学に所属している教員のうちの何パーセントくらいの方がCDTWに参加しているのか。少なくとも私の周りに関する限り、教授法等にももう工夫が必要とする教員ほどFDに関心を示さないという事実があります。こういった人達にFDへの関心を高めってもらうために、どのような工夫がなされているのか。	上記6.の最初に書きました点について知ることができたらと思います。	
5	コースデザイン・教授法ワークショップを5日間亘って実施していることにまず驚いた。本学ではまだ全学講演会スタイルどまりのFD活動しか実施できていないので、本格的なワークショップ形式の研修を企画する必要を感じた。そのためにも、国内外の関連情報を収集しようと思つた。	ワークショップの実際の場面	特にありません。強いて言えば、ちよつと寒かったです。	授業コンサルティングに関すること。スタディ・スキル講座の企画・運営に関すること。

NO	設問5.全体を通して、有用だったこと、発見したこと、気づいたこと、決意したこと、行動に移したいと思ったことは何でしたか？	大学間のネットワークもさることながら、学内でFDIに関わっている教職員のコミュニケーションがまず重要だと感じた。各学部にもいるFD担当者やとざっばらんに話す機会を近いうちに行きたい。	設問6.全体を通して、もっと知りたかったこと、知りたくなかったことは何でしたか？	設問7.講座の運営について、改善できる点にお気づきでしたら教えてください。	設問8.今後、ファカルティ・ディベロップメントで学びたい内容がありましたらお書き下さい。
6		大学間のネットワークもさることながら、学内でFDIに関わっている教職員のコミュニケーションがまず重要だと感じた。各学部にもいるFD担当者やとざっばらんに話す機会を近いうちに行きたい。	知りたくないことは何も無い。もっと知りたかったことは、「うまくいかなかった点」や「苦労した点」、「こんなところに踏んではいけない『地雷』がある」といった、運営上の課題等についてもっと知りたかった。また、ネットワーキング化して共有する「資源」とはどのようなものか(自分の勉強不足なのですが)具体的に知りたかった。	特に気づきませんでした。場の雰囲気作りを含めて、いつもこちらが参考になることばかりです。	海外の先進的な事例は勉強になります。その一方で、上記6のような内容について学ぶ(情報交換する)機会があればと感じます。
7		国際的なレベルでのFDネットワークがどういった背景文脈でどのような活動を展開しているのかを知ることが出来た点が有用でした。現在のローカルな文脈でもネットワーク構築を課題としているので、ここでの知見を実行に移していければと考えています。	今、個人的にはこうしたFD活動をどうやって評価するのか、といった点に強い関心があるため、そういった点についての国際的な動向等について伺えればと思います。目の前の問題としては、FD実施の組織体制があまりにも脆弱なのでそうした点についての示唆ももつと得られれば良かったかなとも思いました(認識レベルでは分かっているのでもいいと言えはいいのですが…)	大変行き届いた運営であったかと思いつつ、特に改善点は見当たりません。	効果的なFDプログラムの企画と実施・評価方法。
8		現在の日本において諸大学(国公立・私立)がおかれている状況を考えた場合、ネットワーク形式でFDリソースを蓄積・活用することの有利さを痛感しました。現在の愛媛大学を中心とするFDプロジェクトがネットワークに発展していけばと思います。	カナダCDTWネットワークのFD展開について関係7大学の一般教員がどのような評価をしているか(受けとめかたをされているか)について。	前半(午前)から引き続き出席している参加者と、後半のみの参加者の、FDに対する向かい合いかた(FDをどのように受けとめるか)についての意識)に若干のずれがあるように感じられました。もちろん前半からの出席者はFDを専門とする者ばかりですので、それなりにFDについての知見があるわけですが、それを生かすためにも第3部としてデニス・バーシャム先生と前半出席者との意見交換などの時間がとれたらと思いましたが、時間があれば、前夜祭に出席したかったです。	ミドルレベル、マクロレベルのFDの展開方法について。特に、後者。
9		カナダマギル大学のFDワークショップの充実した内容が参考になりました。'Supportive environment to ensure maximum benefit from exercise' というワークショップの安心して参加できる環境づくりに共鳴しました。学生中心の授業を工夫して実践していきたいと思えます。	国ごとのFDの取り組みの共通点と相違点についてもう少し学びたいと思いました。日本で「大学間ネットワーク化」を促進する場合の基本的理念及びその利点と問題点について	すべてに配慮が行届いた運営でした。	今回のように、FDに対するグローバルな視野を広げる講座を歓迎します。
10		最近「競争ではなく共有へ」という考え方ができており、大学間ネットワーク(コンソーシアム等)が注目されているが、その理由が少なかったような気がする。やはり1つの大学ですべてを行うのは無理があるので、それぞれが得意な点をさらに強化して、共有するのが、1つの方向なのだろう。			

NO	<p>設問5.全体を通して、有用だったこと、発見したこと、気づいたこと、決意したこと、行動に移したと思ったことは何でしたか？</p>	<p>設問6.全体を通して、もっと知りたかったこと、知りたくなかったことは何でしたか？</p>	<p>設問7.講座の運営について、改善できる点にお気づきでしたら教えてください。</p>	<p>設問8.今後、ファカルティ・デイベロッパ―講座で学びたい内容がありましたらお書き下さい。</p>
11	<p>愛媛大学によるFD関連の出版物(教科書)、昨年の講座のDVD内容は有益で今後のFD支援の参考となるかと思いました。ありがとうございました。</p>	<p>FDネットワークの重要性や諸外国の取り組みの概要をフレームワークとして理解できました。今度は、日本の文脈に合った諸外国の内容を事例として提示して頂き、実践的な具体的戦略を考えていければと思います。例えば、デニス先生との個人的な会話で知ったことなのですが、北米・フランスなどの一部の国々ではいわゆる私達日本人が想像する「欧米流スタイル」が教育方法として蔓延しておりFD支援もその文脈に沿った内容が求められますが、スイスや日本など、学生や教員が受身である教育環境の中で、どのように双方のモチベーションを高め、教学力向上につながるかという点を似たような文脈で比較検討していければと思います。スイスは学生が受身な点が日本と少し似ているとお聞きしたので、スイスのFD支援と教室内の教育方法の事例をもっと具体的に知りたいです。</p>	<p>講座後の懇親会でも有意義な時間を過ごすことができました。インフォーマルな場でも、さらなる情報交換できる機会があればと思います。FDネットワークという視点でいいますと、講座参加者の今後のつながりを発展させるような対策(参加者の連絡先の表示、懇親会の参加率向上)があればと思います。</p>	<p>大教室での学生の参加モチベーションをどのように上げるか。</p>

F D担当者必携マニュアル 第4巻  
『コースデザイン・  
教授法ワークショップとFDネットワーク』

---

発行日 2009年3月25日  
発行 愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室  
〒790-8577 松山市文京町3番  
TEL 089-927-8904  
E-mail info@iec.ehime-u.ac.jp  
本書の無断転写・転写はご遠慮下さい。

EHIME  愛媛大学  
UNIVERSITY